

特集3 | ホスピタリティに見るデザイン

12

# DESIGNING FOR HOSPITALITY

ホテルのインテリア  
俵屋旅館 | Tawaraya Ryokan

客室、料理、接客…、どれをとっても一流と言われる「俵屋旅館」。「一度は行ってみたいかった」と訪れる客が後を絶たないそうだ。ここには、奇をてらったものなど何もないのに、客は虜になって、再訪を夢見つつ帰る。

明治初期の数寄屋風の木造の本館と、1965年に建築家・吉村順三が設計したRC造の新館、合わせて18室。毎年、一部屋ずつ改修し、古の風情を残しながら快適さを追求し続けている。日本人の美意識をよみがえらせる室礼に、誰もが心から癒されていくようだ。

11代目当主・佐藤年氏は言う。「人をも含めて俵屋に存在するものすべてが、俵屋をつくっているのだ」と…。彼女の審美眼をひも解いていくと、「俵屋旅館」の独自の世界観が見えてきた。

客室・翠の中庭から見る：座敷、縁側、中庭をひと続きの空間としてデザインしている

「俵屋旅館」は、石州浜田(現・島根県浜田市)の呉服問屋「俵屋」の京都店が始まりです。宝永年間(1704-10年)に営業を開始し、その後、上洛する石州藩士が投宿するようになり、寄宿が本業になったと記録されています。建物は天明の大火に遭い、さらに蛤御門の変では全焼しましたが、6代目当主が再建。1927年頃に、父が先代から引き継いだ書院形式の建物を数寄屋風に改築しました。父は文人肌の感

性豊かな人で、父が改築した玄関は完成度が高く、手を触れてはいけない名品だと、私は思います。私にとっては聖域です。俵屋は、木造2階建ての本館と、RC造3階建ての新館からなる、全18室の老舗旅館です。私は11代目。1969年に俵屋を継ぎ、現在に至っております。

—

1949年の政府登録国際観光旅館制度の制定にあたって、部屋数と設備様式の

条件が示され、この時、吉村順三先生にいろいろご相談したのがお付き合いの始まりです。吉村先生は師、アントニン・レーモンドさんと一緒によく俵屋にいらっしゃいました。その後、1965年に新館を建設することになり、設計をお願いしました。新築にあたっては、古い日本の意匠を活かしながら国際的に通用する旅館にするために、“和とは何か”から考えました。先生は古建築に大変、造詣が深く、実例を示しながら

多くを教えてくださいました。例えば、「吉村スタイルの障子のオリジンは桃山時代にある」ことなども…。“本物のデザインは時代を越えるものだ”と実感したことを鮮明に覚えています。

—

旅館は清潔で、気持ちの良い、きれいな風が吹いていなければ、快適にお過ごしいただけない。このためには、拭く・磨くなど日々の手入れは欠かせず丹念にして、使い込

む。その一方で、新しいものにも積極的に目を向ける。それが設備系統と水まわりで、洗浄式トイレなどはいち早く導入し、30年間はもつと言われるコウヤマキの浴槽も、私どもは10年で取り替えますが、その間の手入れもまた、半端ではありません。お客さまに快適に過ごしていただくための工夫は種々考えます。例えば、「斬新ですね」とよく言われる、床から鴨居までの大きなフィックスガラスの開口は、昔の草庵や、あるい

は寝殿造りなどのように、内と外を一体化した開放的な空間を再現したいとの思いからです。ところが旅館ですから暑さ寒さをしのぐ必要がありますし、騒音の問題もクリアしなければならない。そんな時に現代の技術によって8-13mm厚のガラスが登場し、ようやく実現可能になりました。窓枠が見えないようにデザインすれば、庭と部屋との一体感をさらに強調できます。そしてプロ中のプロが日々磨き上げることに

## HOTEL'S COMMENT

ホテルズコメント | 唯一無二の空間で…

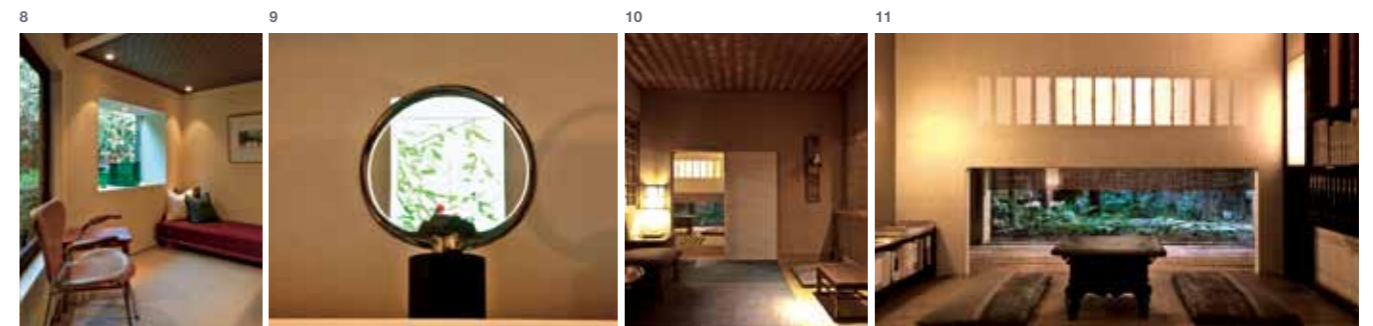
佐藤 年 | Toshi Satow



1—改修・増築を繰り返しているため、内部は巣穴のように入り組んでいる。客室はどれも入り隅にあり、その途中に坪庭やギャラリースペースが設けられている。右の餅花は、12月上旬、正月飾りのためにスタッフ総出でつくられた

2,3,4,5—寸法が絶妙で、当主に“聖域だ”と言われる玄関。唯一、手を加えていない場所。暖簾をくぐり、通り庭を過ぎると季節や行事に応じて室礼が変わる玄関土間に迎えられる。奥には、光と風、緑に満ちた豊かな空間が広がっている…

6—「庭座」と呼ばれるスペース:内部にまで緑を取り囲んでいて、庭を見ながらゆったりとくつろぐことができる。物思いにふけるにはとっておきの場所



7,8—2階図書室「アーネスト・スタディ」:当主の夫、写真家の故アーネスト・サトウ氏が書斎に使っていた場所をメモリアルルームとして開放している。ウェグナーのヘアチェアやフィン・ユールのソファといった北欧家具が、自然とこの空間に馴染んでいる。本棚には写真集を始め建築書、美術書などがずらりと並び、一歩足を踏み入ると時間がたつのも忘れる居心地の良さがある。窓辺の緑は、なんと屋根の上の植栽というから驚きだ

9—彫刻家・流政之氏のオブジェ:小窓の手前に置いているのが心憎い

10—ロビーを兼ねたラウンジ:到着して最初に通される場所で、ほの暗い照明が胸の高鳴りをひとまず落ち着かせてくれる。床暖房のため、坪庭に面しているが温かく、快適

11—ラウンジ奥の図書室「高麗洞」:床に座った時の視線に合うよう、地窓を切っている。韓国の民家をイメージし、壁は韓紙張り。「俵屋旅館」特有の美しさを垣間見ることができる

よって、まるで庭の中に佇んでいるような静寂な空間が実現しました。人の究極の快楽は、自然と共にあるという思いからでしょうか。

全18室の客室に同じ間取り、同じ面積の部屋はありません。敷地内には複数の中庭、坪庭があり、ひとつの庭を多角的に見せて異なる雰囲気を出し、独自の風景をつくり出しています。季節や行事に合わせた

室礼と共に、四季折々の風情を楽しんでいただく趣向が俵屋の持ち味です。お客さまは、そこが醍醐味とおっしゃってください。

あえて、おもてなしについて申し上げれば、おもてなしのマニュアルは、少なくとも俵屋にはありません。私は、「自分の尺度でものを計るな」と言っています。どなたも、サービスは心だとおっしゃいますが、私は「サービ

スは知恵だ」と考えています。「相手を思いやる心と知恵」を持ってお客さまに接すること。私どもの従業員は勤続30年以上の人も少なくありませんので、阿吽の呼吸で理解し、それが下のものへと引き継いで、「相手を思いやる心と知恵」を育んでいるようです。何よりも大切なのは、心を尽くすということはもちろんですが、プロとしての心構えです。

俵屋はまるで博物館、美術館のようだと言われることがありますが、値打ちや時代、西洋、東洋を問わず、この場所に合うものを、そして場とものが活かし合うものと考えています。顕著なのが、2階図書室「アーネスト・スタディ」かもしれません。一見、旅館とはほど遠い北欧家具も、その空間がその家具を引き合わせたかのように、自然に溶け込んでいます。お好きな方はそういうことに感激していただきますが、大方の

お客さまは、そんなに細かいことではなく、「何だか、どこか居心地が良い」と思って来て下さる。人も含めて、俵屋に存在するすべてのものが醸し出す雰囲気、それが俵屋です。

野の中に住めればいい…と思う感じ、そして理由は分からないけれども、何だか居心地が良いと思って来て下さる…、それが私どもの最終の理想でしょうか。(談)

【建築概要】

名称: 俵屋旅館  
所在地: 京都府京都市中京区麩屋町通姉小路上  
敷地面積: 1,260.59㎡ | 建築面積: 757.99㎡ | 延床面積: 1,406.56㎡ | 客室数: 18室 | 創業: 宝永年間 | 設計: 佐藤年、吉村順三(一部)

12



13



14



15



16



17



17



12—客室・泉:「俵屋旅館」の中で最も古い客室で、2006年にリノベーションされた。ガラスが入っているとは思えない開放的な空間。うっかりそのまま庭に出ようとする人もいるとか。ガラスは毎日、丹念に男衆が磨いている。左に置かれた李朝のバウダジは、当主が一目惚れして購入したもの | 13—土間の三和土に埋め込まれた陶板:主張せず、周囲に馴染んでいる風合いが絶妙  
14—土間脇のスペース:それぞれの客室には、自分の居場所的なスペースが設けられている。椅子に座りながらポーツと庭を眺める時間は絶品  
15—湯船に浸かった時の庭との関係を第一に考え、デザインされた。浴槽は、ヒノキよりも耐水性・耐湿性に優れるコウヤマキを使用。温度が下がりにくく、何といっても、お湯がなめらかだとか…  
16—柱以外はすべて解体し、木材を再利用してリノベーションしている。電話やテレビなどは目につかない場所に収め、非日常空間を演出 | 17—当主自らデザインした行灯:洗練された美しさが漂っている

18



19



20



21



21



22



22



18—客室・晩翠:大開口によって、青竹の庭は一幅の絵のようだ。また、建具をすべて開け放つことが可能。内と外の境界がなくなると、より開放的な室内になる  
19—自然と腰を下ろしたくなるスペース。床をスキップさせ、さりげなく空間を分けている  
20—ベッドルーム:韓紙張りの壁に照明がほんのり反射し、穏やかな眠りにつけることは想像に難くない。開口を下に配して直射光を防ぎ、心地良い目覚めを確保。ブラインドは電動式で至れり尽くせり  
21—客室・翠:シンプルにまとめられた客室だが、大開口のフィクスガラスを設け、内と外を一体的にデザインするという「俵屋旅館」の真髄が潜む。緑側の奥には書斎が隠れている  
22—書斎:約1畳の空間にあるのは椅子と机だけ。ピクチャーウィンドウ越しの庭の風景を独り占めできる贅沢さはたまらない、と人気がある